



超短編集

光野 朝風

日本全国に咲くソメイヨシノは全てクローンのため全国一斉に咲くのだとお昼のワイドショーで紹介していた。

。 新入生の高坂は定時制の高校から進学したため、知り合いがおらず不安があった。

ちょうど構内掲示板に新入生歓迎会を兼ねて大学主催の花見が開催されると書いてあったので、思い切って参加することにした。

四月も半ば、今年は例年よりも気温が高く一週間も早く桜が咲いており、もはやほとんど散っている状態。しかも花見前日に激しい雨が降り、快晴と言えど地面はぬかるんでいた。

それでも花見客には関係ないらしく、バーベキューの煙はあたり一面を覆い、酔ってはしゃぐ人間は数知れない。

高坂は泥で汚れた新しいスニーカーを見て、酷く気分が落ち込んだ。花見会場が近場なため少し地面が乾くだろうことを見越しワイドショーを見てから来たが、大差はなかった。

会費の三千円を払い、飲み放題のメニューを見渡す。未成年は飲酒ご法度だが、誰も自分を知らないだろうと自棄に近い暴挙に出て日本酒を並々紙コップに入れてもらった。

。 残り少ない桜の花びらが風と共に舞い、紙コップの中へと落ちて日本酒を彩った。

その時高坂の目に映った。

食べかすを狙い翼を広げ舞い降りる鴉。

。 午前中から飲んでいたのでか三人で肩を組みながら大声を上げている男子学生たち。

社会人数人でブルーシートの上で飲んでいて、横の若い女性に話しかけている赤

ら顔の三十代前半くらいの男性と体を縮こませながら酒の入った紙コップを両手で持ってやや上目遣いに周囲を見ている新入社員らしき女性。

汚い紺色のジャンパーとジャージを着て錆びたママチャリをこいでいる無精ひげで白髪交じりの男性。

炭の上で焦げ始めモクモクと煙を上げている肉。

二人で乾杯しながらピースをしている若い女性たちを撮っている友達の女性。二人の背後に忍び寄る男性。

高坂は父親の都合で転校を何度か繰り返したが、各地の桜の下で同じ光景を見てきた。

「クローンのようだ」

冷めた感情が襲うと、ずっと目の前の景色が遠くなるようだった。そのまま手が届かなくなってしまいそうな恐れを抱くと、しがみつくようにして手に持っていた日本酒を一気に煽った。

「お、新入生かな？ いい飲みっぷりだね。何学部？」

酒臭い先輩が慣れ慣れしく肩を組んでくる。

高坂はくらりと眩暈を感じ、汚れたスニーカーで落ちたばかりの綺麗な桜の花びらを踏み潰した。

電気を消せば、部屋は見えなくなるから、私、ほんの一瞬だけは忘れられると感じてた。

長いようで短かった数ヶ月。彼の汗の匂いがシーツにまだ染みこんでいた。

大学生活最後の数ヶ月、就職も決まり、単位も取りきり、後は卒論さえ出せば卒業への条件はすべて整うという状況から始めた同棲。

二年生で付き合いだし、付き合い三年目を迎えずに卒業とともに別れる。

「お見合い結婚？ なにそれ。今時そんなのあるんだ」

「私のところ、村で、まだそういうの残ってるんだ」

ずっと都会育ちの彼にはピンと来ていないようだったけれど、私にとっては家族親族と絶縁するか否かの問題が重くのしかかかっていて、彼の気分は結婚とかそういう気分じゃなくて、学生のままで。

部屋にはまだ二日前に使ったコンドームの空箱が床に落ちていて、彼がこの部屋で読んでいたランボーやボードレールの詩集や歴史小説などが散らばっていた。

「詩なんて読んでいる人初めて見た。それ面白いの？」

「わかんないから面白いんだよ。色々考えてさ、わからないなりに想像するのが楽しいの」

「私のことは？」

私のポツリとつぶやいた言葉に私を少しだけ見つめ、それからまた本を読みだしながらぼやくように言った。

「だって、動いてるじゃん。これって止まってるだろ。動いているものは日々変化しているからわからなくなるじゃんか」

それ以上は彼に何かを言うことは出来なかった。

私たちは互いに好きだった、と思う。

彼が居なくなっただけの二日間は枕に顔を押し付けて匂いを嗅いだり、天井を見つめていたりした。

食べ物も水もろくに口に入れていないのにトイレにだけは行きたくなって、止まらない時間と自分のしていることに虚しささえも覚えて、冷蔵庫から取り出した残りの缶チューハイを一本開けては、彼と飲み干したテーブルの上の空き缶に一つ加える。

彼との思い出に浸っているわけではなく、ただ鼻の奥に未だ香ってくる彼の体臭を脳裏に吸い込んで吐き出そうとする。

その繰り返しだった。

私は彼以外の女になる。

もしかしたら奪い去ってくれるのではないかと一瞬考えたけれど、霞のように消え去った。

今の私たちでは、どうしようもできないくらい覚悟ができなかった。ただそれだけの話なのだ。

彼は社会人となって都心部に残り、私は田舎で誰かの妻となる。

彼が残していった服や下着や本や男性用の小物は、一つ残さず捨て去ることになっている

オムレツはフライパンの技術、いわば火の扱い方を見るには一番いい料理なんだと彼が言っていた。

火を入れすぎると食べる頃には卵がカチカチになっているし、かといって固まらぬ頃には巻けない。

巻き方も人それぞれあるが、基本はフライパンを奥側へと傾けて奥の淵のところを利用し弱い力加減でフライパンを返して巻いていくか、和食の料理人は出汁巻き卵を手前に返しながらかきで巻く要領でやるが、いずれも速さとの的確さが求められる。

彼は技術者で料理人ではなかったが、何かを作っている時はいつも真剣で、自分で批評を繰り返していた。

私は形が悪くても食べられれば文句は言わない。

だけど彼は私の料理にこそ文句は言わないまでも、自分の作るものに関しては全ていまいちだと言っていた。

「そんなことないよ。綺麗だし、おいしいよ」と本心から言っても、彼は納得せず料理を通して別の何かを見ているようだった。

正直彼の悩みの正体がわからず、言葉のかけ方もわからなくなっていた。

彼との間に子供はいない。私は子供が好きだから彼との間に何人が欲しかったけれど、彼は「子供を見ると自分が体験したことや不完全さを押し付けてしまいそうで怖い」と言って、いつも消極的な姿勢を見せた。

彼は私より五歳年上で、私は三十代後半に今年なる。

一子もいない状況に妊娠率のデータを見るに焦りを感じ始めていた。かといって彼に子供を作ろうとしないことで責めるわけにはいかない。

以前に軽く「そんなに悩むことないよ。気楽にすればいいじゃない」と言ったら「じゃあ気楽になれば道は開けるのか。僕はこの道でどうにかしたいんだ」と

逆に怒られたことがあった。

仕事のことはあまり聞けないし、聞いたところで何もできないから聞けない。だから詳しくは知らない。

それでもオムライスのように何か包めるものは考えられないのだろうか。火加減や塩梅なんて言葉があるくらいだから、なんだってバランスが必要なのに私たちは理解しあえないところでギクシャクしあう。

オムレツの最高の状態は開いた時に半熟状態でふわっとしているのがいい。

でも美味しいよね、よかったよね、と笑いあえる方が最高の状態じゃなくても幸せだ。

私にとっては彼がいるだけで最高の旨味調味料を加えられたのと同じだ。

だから、今度から無視されても伝え続けようと思っている。

形が悪くても栄養として摂取できるし、それで生きていける、と。

春の陽気は押し出され、熱気交じりのべたつきが肌を覆うようになってきていた。

深夜に雨が降ったのか、アスファルトはまだ水溜りが多く残り、部屋は蒸してカビ臭い空気が鼻の奥をくすぐる。

古臭いアパートの一室は気分が悪くなりそうなほど過去の何かの臭いが充満している。汗にべとついても節約のためにシャワーは一日一回、その他は濡れタオルで体を拭くくらいしかできないし、ましてや貧乏生活では、屋根と壁があるだけマシだと思わなければやっていけない、とユウジは思った。

小さな卓上時計を見れば針は早朝五時を示している。その傍にある布団を見れば見知らぬ女が転がっている。

名前も知らぬ、誰か。互いに酔っ払いすぎていて聞いた名前も、もう忘れていた。

みか、みさと、みゆき、み、み、み、みえ、み、み、み、み、みちこ。

まだ酒が残っていてユウジの頭は粗悪な鐘を鳴らしたように不協和音を響かせている。

顔すらもよく覚えていない女を覗き込むと、マスカラは落ちてパンダのようになっているし、チークは落ちて精気のない色を晒していた。正直見れたものじゃないと顔を背けかけ、シーツについた化粧の汚れに不快感を覚え、怒りすらも湧き上がりかけた時、ふと完全に化粧の落ちている頬の美しさが目に入った。

もしかしたら化粧を落としたら案外綺麗な肌をしているのかもしれないと、塗装のように厚く塗られた顔の奥を想像していた。

部屋を見れば昨日自暴自棄になり投げ出した楽譜が散らばっていた。汗か涙かわからない雫でインクが濁って音符がぼやけている。

投げ出したのに、捨てきれず、破ることもできず、心臓に無数の掻き傷を作った

いくらなののに、まだどこか大事に思う未完の作品。

抱いた女の、汗に冷えた肌がへばりつく妙な感触だけが体に残っている。それなのに熱い湿気が起きたばかりのユウジの発汗を促す。

自らに対し怒り、焦り、関係のない記憶まで呼び起こして泥沼に自ずと堕ちていく。出口が消えて闇に飲まれる。創ることはユウジにとって苦しみなのに、これしかできない不器用さを憎んでしまう。

譜面を踏み、足裏にへばりつく。剥がして見ると最後のページだった。

ピアノ曲。「ミ」で終わって、その先がない。

み、み、ミ、ミ、ミ。

起きたら女の名前をきちんと聞こうと決心し、部屋に散らばった楽譜をユウジは集めだす。

今日は真夏日になると昨日の天気予報が告げていたのを思い出した。

小さな姿と大きな存在

「世界」は「認識」で。

「世界」は「自己完結」といつしか同じになって。

霧がかかった山間から朝日が昇る場所もあれば、人工物に切り取られたパッチワークのような景色の下から朝日は昇ります。

太陽はいつも一緒だが、見る人間と、見る場所によって姿は変わってくる。

彼女は夜が怖かった。

夜一人で眠ることができない。

夜暗闇の中で目をつむり続けることが出来ない。

「どうして？」

「太陽がずっと強く照らしているから」

彼女の光は雲により霞むこともあれば、煌々と輝き続けることもある。

その姿は冷たく美しく、そしてやわらかだった。

絹を肌から滑り落としたように、憂いを持った瞳で見つめ続け、恥じらいを持った姿で素肌を精一杯の指先で隠したがる。

その日は雲ひとつない晴れやかな夜だった。

星々の歌声は夜空に点滅し、流星は歌を飾る。

湖は月の姿をありのままに映し出し、時折風に揺れながら波紋を広げていく。

美しいあなた。

湖は汚れなき姿を映し出す。

美醜苦楽悲喜。偽らぬそのままの姿こそ美しい。

そこには誰の「世界」も介在しないのだから。

「あなたの愛するものは？」

「私は自ら輝けぬ影に等しい存在。そんな存在に愛するものなどあってはならぬのです」

太陽によって輝く月。

「偽らぬ心の姿は既に映しております。私はあなたを見つめられぬ存在。雲により、御姿が遮られることの方が多い。それでも、御姿が見える度に、偽りなき姿を私の中に映し続けています」

その湖はあまりにも穢れがないため、生き物が一切住めない湖でした。

だからこそ、ありのままの姿を映し出すことができたのです。

人はむしろ月の姿よりも昇りゆく朝日に希望を感じ、その姿に我が身を重ねようとします。

熱く、何ものをも焼き尽くす炎を上げながら太陽は雄々しく叫び続け、その光を周囲の存在に届け続けます。

舗装された街中の道の上で、男は微かに残った月を見上げます。

自暴自棄になり、酒に溺れ、帰り道すらも忘れたいほどに我が身を失いながら。

太陽が電波塔の脇から上がってきて、月を徐々に消していきます。

湖と月との語らいを知りもせず、太陽の言葉に体を傾け、朝日の清々しさを体一杯に吸い込もうとしている。

男は希望と、昨日までの辛い経験とを重ね合わせ、涙を流しながら悔しさを抑えこんでいます。

「世界」はどこかしこに存在しているにも関わらず、男は「世界」に閉じこもっていました。

悲愴は他者を貫かない。

その気持ちを抱いた当人を自刃のように深く……。

手を伸ばし指先が栄光に触れんとした時、男は闇に閉じ込められ胸を鋭い棘に貫かれた。

暗く息苦しい閉所の中で虫の息で震えていた。

くたばりそうなほどの熱帯夜が続いていた。

クーラーもまともにつけられぬほど生に興味を失っていた。

絶望とは臓器も魂も掴み引き抜くかのように、体の中に何も残さない。

朝目覚めると体が脱水して硬直しているのを感じていた。

まだ動けた。

全てを出し尽くして男は失敗し、魂の抜け殻と化していた。

当然そのような状態では女に逃げられ、罵声の限りを尽くされ、友達も消えていった。

アイアンメイデンという拷問器具がある。

これは棺桶のような器具の中に針が仕込んであり、閉じることで中の人間を串刺しにする。

針の場所によっては絶命には至らず、長らく苦痛のみを味わわせることができる。

暗闇の中で微かにすぎるのは、柔らかな思い出。

絶望とは死にいたる病だと言っていた人間がいたな、と思った男はタバコに火をつけ、深く煙を吸い込んで肺に巡らせ水よりも先に巡るニコチンの感触に煙草を挟んだ指先を震わせていた。

この社会のどこに立っていていいのかわからぬ男は思いっきり吐いた煙で曇る視界の中に、いつまでもガタガタと余計に震えている指先をぼんやり眺めていた。

お前は怖いのか。

死んでしまうのが怖いのか。

魂は死んでいるはずだと思っていたのに、この指先だけは死ぬことへの恐怖を感じているのか。

部屋の温度は三十八度を示している。

なのに体は寒気を感じている。

男の思考はさ迷っている。

擦れた咆哮を喉の奥から出し、灰皿まで手を伸ばせなくなったため煙草の火を奥歯で噛み消す。

舌が焼け、歯の神経に熱さが伝わる。

確かに愛していた女の最後の逢瀬が指先に甦る。

乳房を握り、体を抱きしめ、体温の熱さを指先で感じた最後の夜。

這う。這う。震える体で、這う。無様にも。

もう洗面所やキッチンで水を汲めそうもない。立ち上がれないのだ。冷蔵庫にも何も入ってない。

残っているのは便所の、水。

闇に閉じ込められ、無数の針に貫かれた絶望の先に、たった一つのぬくもりと、希望を見つける。

便所の陶器に女の白肌を思い出すとは、いかにも滑稽だと可笑しくなり、男はその水を飲むべく両手を差し伸べる。

その時、聖母は微笑み、男は傷ついた命を握った。

墓参りが終わると夏の風は影を潜めていた。

日差しは夏のままだったが、肌に優しい冷たい風が夜には流れるようになった。

サヨリは少し出てきたお腹の肉をつまみながら「そんなことないよー。全然痩せてるってー。サヨリがデブだったらほぼほぼみんなデブになっちゃうんだから、やめてよねー」と言っていた友人を思い出しながら、横になっていた体をアイナに重ねた。

「暑いよー」と体をよじらせるアイナに「私ってそんなにむさ苦しい？」と冷たく聞くと「今日どうしたの？ 様子おかしいよ」といつものように微笑をむけた。

いつもアイナは優しい。怒ったところを見たことがないし、正直本心は何を抱えているのかわからない。

それでも最初の理解者はアイナだったし、サヨリが男を愛せないことを受け入れてくれた。

黒い墓石は鏡のように晴天に浮かんだサヨリの肌を映しこんだ。

サヨリはその日、背中からアイナが優しく包み込んでくれる姿を墓石の中に陽炎のように見た。

手を伸ばそうとした時アイナの姿は消えていた。

ただ、もどかしい。

線香臭い部屋。若くして死んだサヨリの母が仏壇から同じく微笑んでいた。

アイナはスカートから伸びる足をうっすらと開き、窓から吹き付ける柔らかな風を受けていた。

少し汗ばみベトリとしているのを、サヨリは指で這うように確認していた。

「くすぐったいよ。サヨリ。ねえ、くすぐったいってば」

畳の上で足を泳がせるアイナの上に覆いかぶさったので少しだけ自由を束縛しているような気持ちを覚えた。

そのまま、ずっと手を太股へと上げていくと余計に汗ばんだ肉の感触が手にへばりついてくる。

「サヨリ、私、怖いよ」

「え？」

二人の関係が進むことになのか、それともサヨリの存在が怖いのか、聞いてしまったら全てが壊れてしまいそうで口を閉ざしてしまう。

サヨリは母の生前の衝撃的な告白を思い出した。

「私ね、あなたが欲しかっただけなの。だからお父さんと、どう接していいか、いまだにわからない。感謝はしてるけど、私にとっては難しいことだから」

十三年前の当時、中学三年生だったサヨリには理解できない言葉たちだった。

アイナとは、危うく、成り立っている。

その危うさの正体もわからず無性に悲しくなってアイナの唇を噛むと母の香りが一瞬し、ぞっとした。

アイナの唇からは血が出ていたが微笑んだまま憂いを帯びた目で白い肌が近づき頬に唇の血を塗りつけた。

夏、最後の日だった。

この後の週間天気予報は今日より五度以上も最高気温が下がり続け、そこを抜けてももう秋の様相になるという。

私は「逃げ水」だった。

夏の最後の名残を受けてアスファルトの果てに浮かんでいる蜃気楼。

ある海岸の砂浜のキャンプであなたに初めて触れてからというもの、恋という名のプリズムに当てられ、その光に魅了されてばかりで、声をひとつも出せずにいた。

あなたの手が水着姿の私の肩に触れて、唇が近づきそうだった時、ひと時の満ち干きの中に身をうずもれさせてはいけないと唇をそらして微かな抵抗をした、あの瞬間から、近づこうにも近づけず、近寄ってきてもただ逃げるばかりで言葉を失っていた。

私はあなたを遠くから見続けることになった。

会える時も仲間内で集まる時ぐらいしかない。

二三ヶ月に一度ほど、花占いをするかのように待ち続ける日が続いた。

じりじりと焼き付けられた心には、いつもあなたのこと。

恋は遠く、声は遠く、光は遠く、オアシスは幻。

友達が撮ってくれた唯一の写真を毎日寝る前に携帯電話ごと握り締め夜を明かしていく。

そして、夏、最後の、日。

私は「逃げ水」だった。

恋の最後の照り返しを受けて熱に浮かされ体中を火照らせている情調。

夢の中でまで抱かれていたのに、あの夏の確かな手の感触がもしかして偽りだったかと思うだけで怖くなった。

私は苦しみに耐えられるほど強くはなかった。

その日ちょうど話し相手になってくれた男友達に私は甘え、体を寄りかからせ、そのまま包まれて場所を変えて朝まで過ごした。

見えているものをまるで蜃気楼のように思ってしまい、逃げた先で流されたようなものだった。

彼は少しでも追ってきてくれたのだろうか。私がまるで「逃げ水」を見ていただけなのだろうか。

意図しない男の手に触れられ、それでも安心を得た私は結局彼のことが好きではなかったのだろうか。

夏の最後の……。

夏の……。

今でも波の音が聞こえる。

彼の回してくれた手を左肩にいつまでも感じる。

余韻を残しながら、熱を冷ましながら、秋は少しずつ進んでいくだろう。

そして秋の空に包まれながら木々の葉は頬を染め上げて色づき始めるだろう。

私はどこまで行くのだろう。

夏の名残は心に滲み、私は見えぬ季節の変化の先に、心のあり方を決めていくのだろう。

それでもあの一瞬の出来事を、夏の砂浜の刹那を、忘れずにいる。

田村は会社からの帰り道、行きつけの居酒屋に寄り、焼き豚に冷奴、イナダの刺身をつまみに、キープしていた焼酎ボトルの酒を四分の一ほど飲み店を出た。

夜も蒸し暑くなってきており、雲ひとつない空には満月が転がっているようで気分良く鼻歌を歌い足取りはしっかりと帰宅した。

家賃が多少安かったのでマンションの一階に住んでいたが男一人住むには何の問題もない。バツイチになってからは家で食事をすることもなく1LDKの部屋に引っ越してきたが、結婚生活よりもずっと快適だった。

男一人暮らし。部屋も自然と汚くなりがちだったが、大事にしている宝物があるため、なるべく綺麗にしていた。

玄関を開ける時、風が部屋の奥から吹いてきた。

「おや？ 窓でも開けっ放しにしてきたかな？」

靴を脱ぐ際、玄関の電気をつける。若干いつもより周囲を見回し、特に変わったところがないことを見てから中へ入っていき、奥の部屋のふすまを開けて部屋の電気をつけると荒らされた形跡があった。

ふと目をやると窓ガラスが割られ鍵が開けられていた。

「あ、空き巣だ！」

警察に連絡するよりも前に部屋にあった「祭壇」や「祭壇奥」を確認するが、こちらは特に手付かずで済んでいた。

タンスは物色されており、高級腕時計が三点ほどなくなっていた。被害総額は百八十万ほどだった。

カード類は常に持ち歩いており、銀行通帳や判子に関しては大き目の金庫に仕舞ってあったおかげか、被害はなかった。

警察が来て事情聴取される際「祭壇」の方を見て「こっちの方は大丈夫だったん

ですか？」と聞かれると「大丈夫です。きっと趣味が合わなかったんでしょう」と田村はニッコリ笑った。

さすがに立派に飾られてあるのか警官は手を触れようとせず「ほう。これは随分と珍しいものですね」と祭壇に飾られてあったフィギュアのの一つを見て田村に振り向くと、田村に緊張が走った。

——こいつ、もしかしてこの価値を知っているんじゃない……

「いやいや、ただの趣味で安物ばかり集めてるんです。こんな年になっても子供の頃が忘れられなくて」

ハハハ、と笑って見せるが警戒心はいつになく張り巡らされている。

田村が発する緊張感を警官は「疲れ」と見たのか、何かあったらまた連絡してください、と言って事情聴取を終わらせて出て行った。

窓ガラスも修理しなければいけない。だが被害総額は二百万も行かないだろうと安堵した。

何せアニメや特撮のフィギュアを飾ってある「祭壇」の一番高いものが特撮第一号記念で作られた未販売の限定品ロボット四百六十五万。時計三つよりも高く、ある意味血眼になって探し当て、離婚の原因を作ったほどの代物であった。

その他「祭壇」上にある五点は一体五十万越えをしていて、総額二百三十万。どれもこれもプレミアがついているから今も値段は上がり続けているだろう。

そして奥の押入れの中にあったカードやシール類も一枚数万の値段がついているものが六十点以上はあるため、こちらも総額で百万以上の価値はある。

「祭壇」を見つめ、安堵の溜息を長く吐いた。

「物の価値がわからないやつでよかった」

しかし田村の持ち物、価値がわかったところで、今度はきちんとした買い手を見つけたのも大変なのだが、もしかしたら田村の玩具コレクションの価値を上げているのは他ならぬ田村自身なのかも知れない。

朝の光に滲んだカーテンが揺れる。

窓を開けていた。

反対側の部屋の窓も開いているだろうから、彼女がトイレに行くためにリビングのドアを開けた際に、風がドアの風圧で流れてきたのだろう。

僕と彼女は別々の部屋で過ごしていて、彼女は僕が深夜まで起きていて作業したり、部屋をうろうろしたりすることに対し神経質に苛立つ事があった。

彼女と同棲しだして三年になる。最初は一緒に寝ていたのに、二年目に別々の部屋になり、僕は僕自身の感情を全て抑えなくてはならなくなり、そしてネットで知り合った女性とメッセージで、こっそり電話をしながら本能的な欲求を満たしたりすることもあった。

「最近、冷たくなったよね」

同棲して一年が過ぎたあたりに突然言われた言葉だったけれど、僕にとっては青天の霹靂に近かった。

というのも、僕の活動そのものは彼女に付き合う前から散々伝えてきたし見せてきたし、その時僕の彼女への愛情そのものを根底から疑われるようなことは一切してこなかったし、彼女は僕の活動を認めてくれたものばかりだと思っていたら、結局は自分が大事にされること最優先の発言に思えたし、まさか彼女がそんな自己本位な発言を同棲一年もしてから言い出すとは思ってもみなかったからだ。

僕は僕のしたいことに専念していて、きっとそれは、もっと多くの人のためになるはずだと信じて活動を続けているというのに、今更「私に構え」というように、暗にメッセージを送られても僕は困る。

崇高な事をしているという傲慢さはないが、僕にしかできない使命感や僕だけが伝えられる重大なメッセージがあるからこそ、僕は諦めずに続けてきたし、続けてこれたし、当然応援もされてきた。

僕は彼女の行動が不可解でならなかった。僕の邪魔をしようとするのか。さもなければ、我欲が生まれてきて、もっと大きなものを見つめようとする気持ちすら見失って利己心が肥大化してしまったのか。

僕にとってはまったく不可解だった。

さらに不可解だったのは、懸命に料理を作って帰りを待っていたり、いちいち帰りの時間を気かけたり、二人の間の記念日をいちいち気にしたりと、妙に関係のないことにこだわりだしてきたことだった。

「いつ帰るの？」

「もうすぐお休み取れる？」

「今度一緒にここへ行きたい！」

僕の活動は不定期で人との繋がりも重要だから 一般的なサラリーマンのように

時間調整がしづらし、いちいち彼女のわがままに付き合う道理もなかった。

理解とはなんだろう。僕は彼女のことを理解していたつもりだ。でもまるでこんな行為は裏切りに近いじゃないか。なぜなら、僕の活動を理解していながら阻害するのだから。

何故。何故。何故。何故。

僕は懸命に今の忙しい予定の中でも愛しているではないか。

精一杯愛しているのに、何がおかしくなって、彼女はこうも私の行動をいちいち阻害するようになったのか。

わからない。気でもふれたか。もしくは彼女が何か隠しているのか。

一人、脳内を考え事がぐるぐる回る。光の微粒子は部屋に満ちてきている。

朝の光に滲んだカーテンが揺れている。

僕は何故か彼女のことを眠れずに考えようとしている。

三年目にして始めてのことだった。

風はもう流れてはいないが、新たな光がカーテンを染めていた。

それを僕は心底眩しいと感じ、目を背けた。

小さなホールで客に囲まれて、貴女はスポットライトを浴びていた。

長らくやっていたであろう証が、真剣に聞き入るお客で表わされていた。

普段はかわいらしいあどけない声でしゃべっているけれど、歌声も変わることはなかった。

美しい声は時を彩り、夜明けの日を誘っていた。

今日はとても美しい日が始まるのだろうと、その明るい声だけで期待できる。

人の声は不思議で、その声に聞き入る人たちの瞳が輝いている。僕もまた、そうになっていたに違いない。いつもより見える世界が輝いている。

それはきっと、貴女自身の魅力であり、声を通してわかる人間性だったり、その人の優しさの広げ方だったりする。

貴女の気配りは細かく利いていて、できる限り一人一人、時間が許す限り、その瞳を合わせて話そうとする。

これが人の美しさというものなのだろう。

貴女を見ている僕は刺々しく、ナイフをちらつかせて人を脅しつけているに過ぎないチンピラだ。

偶然街のバーで歌う貴女に出会い、僕は僕自身の愚かさに色々気がつかされる。

部屋の中じゃ外の様子はわからないけれど、きっとここから出れば眩しい光が待っているのだろう。

お客のふかす煙草の煙で少しだけ貴女が見えなくなる。

酒の香りは自分だけが発しているようにも感じる。

何杯目なのだろう。酔って、苦労とか悩みとか考えないで、全部頭の中から飛ばして、そろそろ限界というところでズブロッカが空いていくのが止まる。

これ以上は酔いすぎていけない。ぎりぎりの場所でゆらゆら揺れながら、貴女の歌を無心で聴くためには、まるで麻薬のように酒を煽って自分を消さないといけない僕を隠しながら。

手を広げ、伸び伸びと声を広げる貴女。

一瞬歌声に脳天が貫かれて、嗚咽しそうになるのを堪える。

貴女と目が会い、僕は目をそらす。恥ずかしさを覚え、顔を掻き毟って別人になりたいくなる。

貴女は僕が来たとわかったのだろうか、微笑みながら、より高らかに、声色強く響かせる。

暗闇の魔を打ち払い、女性客のロングカクテルの氷が半分以上溶けても少しも減らぬ、その歌声。

吸い込まれるのではなく、背中から優しく抱かれる。

僕は曲の途中で時計をチラチラ見る。

ずっと聞きたいたい、ここにいたい、そんな個人の願いなど通せるほど裕福ではない。

さもない毎日のやり取りの中で、ひとつの安らぎを見つけ、僕は寝起きの学生のように、後数分、後数分と伸ばしつつ夢の中に戻り浸っていたい衝動に後ろ髪を引かれていた。

秒針が十二を突いたら、行こう。

用事がある。外に出て汚れた空気を吸う気分になるのは本位ではなかったけれど、僕には僕が背負った世界がある。

早い秒針。鼓動のように。

ステージの貴女に背を向け、チップをバーテンに置いて徐々に離れていく。

またお互いの時間が合えば歌声を聴けるだろう。

小さなホールのドアを抜けていくと、眩しいほどの朝日が昇りつつあった。

僕はそのまま都会の片隅へと消えていく。自分が生きていくために、背負ったものを深呼吸で意識しながら。

「だからよお、いつも言ってるんだろー？ ほら、ここ。もっと削れるだろ。こんな甘い見積もりじゃ他のところに仕事もっていかれんだろお？」

いかにも嫌味そうに不精ひげを左手で撫で、トントンと右人差し指を強めに叩きながら指摘する中園を見て、ここから三十分以上は説教にも満たない小言が続けられると思うと、うんざりを通り越し既に脱力感に苛まされそうだった。

「いつも俺が言ってるのに、守ってくれねえんだもんなあ。俺そんな難しいこと言ってるかな？ 簡単なことだろうがよ。経費削減しないと利益出ないだろ？ 子供でもわかるぞ」

しかし最低限という言葉がある。それ以下原価を割ると、もはや品質そのものが低下していくという限度。

牧島は既に「品質劣化」を見抜かれ、少しずつ顧客が遠のいていっている現状を見ているだけに無力感があり、デスクで永遠とそれらしい指示を出して知ったようなことを並べ立てている中園に怒気すらも無意味であることを悟っていた。

「お前みたいにミスばかり重ねて、こうして俺のところに来るから俺が寝ずに会社に残って必死に仕事しなきゃいけないだろ？ 俺今日三時間しか寝てないから。昨日残って仕事してたからさ」

社長でもない中間管理職の中園はワンマン社長の指令を受けた部長から細かく仕事の内容を指摘され、そのことでも苛立ち愚痴を一日中言う始末だし、それだけならまだしも奥さんとセックスレスで家庭内で邪険にされていることさえも会社に持ち込んで当り散らすことがあるものだから、部下たちはたまったものではない。

「もう少し休みとれとか、家族や子供のことちゃんとかまってとか、俺仕事沢山あってどうにもならないのにさ」

いつかの愚痴で言っていた。

「小遣いなしさー。全部取られちゃうんだもんなー。お前は結婚してないからわからんよなー。結婚生活の苦労なんてよお。家族サービスもしなきゃいけないし、俺休まる場所ないよ」

「自分の時間をもう少し持てるよう、奥様に相談なさってはいかがでしょうか」

と牧島が告げたことがあるが、

「これが結婚生活なんだよ！ 結婚するってこういうことなんだよ！ お前もなあ、早く結婚しろ。よくわかるからよお」

と多少血相を変えられ、いかにも諭すように肩を叩かれた事があった。

「家庭内のことなんて知らないよね。奥さんだって旦那の仕事内容わかっているなら少しは言うべきところ抑えればいいのか」

女性社員たちが給湯室で刺々しい声で話しているのを、お茶を飲むついでにじっくり聞いてきたが、ろくな評価にならないのは目に見えている。

また女性社員が多い職場なので男性が多いところよりも雰囲気が違う。人のいい人たちが集まっているせいか、ほんわかしているというのだろうか、普段はピリピリしていない。

中園は不思議な会話をする人間で、すべて自分に置き換えて話をする。

例えば自分の悩んでいることを話すと「いやー、俺はそうは思わない。なんでこうしないのか」と言ってくるし、飲み会の席でも「俺、こういう味付け好きだからさー」と、人の味覚にも口を出す。

当然、飲み会は密かに計画されることになり、集まりは他言無用となる。

そして、仕事上重大なことのみ報告され、小さなことは下だけに共有され揉み消される。長い小言を避けるためだ。

部下たちは余計な事はせず、最低限の仕事しかしない。それさえもバカらしいと思う人は辞めていくのだが。

牧島も流れてくる言葉を既に「意味」として認識していない。ほとんどが「音」と化していた。

「牧島さん、よく耐えられますね」

と説教直後に小声で言われた時、切り替えができず条件反射的に頷くだけだったことがあった。

牧島の場合、既に「型」が出来ている。

神妙そうな顔をし、「はい」とハッキリ過ぎずきちんと聞こえるトーンで返事をし、最後には「申し訳ございません。反省して次からはきちんとやります」と締める。

それでも顧客のことを考えると「もっとこうしたほうが」と、あくまで「ミス」程度の小さな反逆を試みるが、その度に中園の前で時間を浪費させられることになる。

中園は仕事を懸命にやっているはずなのに、周囲との連携が上手くいかない。噛みあわない歯車が全力で風を切り音を鳴らして回り続けているようで周囲も落ち着かない。また、せっかちな部分もあって、やたらと催促する。

そして「この職場の中で自分が一番努力している」と思い込んでいるし、それゆえに細かい指摘を受けると「俺の努力が否定された」とふてくされ、三日以上は同じ愚痴を繰り返し言いまくっている。

特に部長の言い方がきついわけではない。業務上押さえておきたいことを指摘している範疇だったが、それが「懸命さへの否定」と取れるらしい。

相手をするほうはたまったものではない。仕事以外のことで倍以上もストレスを抱えることになるため、部下たちは各々のストレス発散方法で明日も出勤してくるのだろう。

中園のせいか、牧島も昔やっていた水泳を改めて再開することになったし、何かしていないと職場のことを思い出し恋人にも当たってしまう始末に正直ぞっとして、慣れない絵なども始めたのだった。

水の中は音が地上と違って伝わってくる。水の音、水の感触、掻き分けて進んでいく体。クロールの途中で目をつむって水の中の暗闇を感じてみる。ただ無心になれる。プールから上がるとき、別の人間になった気がして地上の疲れとは違った全身に満遍なく広がる疲労が心地いい。

絵もやってみると、当然下手だったが模写も飽きて外に出たくなってくる。今度デートがてら、自然の多い場所にでも出かけようか。恋人が同意してくれるか。行くとしたらどこがいいのか、調べもしなかった場所を調べ、名前も知らなかった雑草が少しずつ性格を持った花や草となっていくことに喜びを覚えていった。

牧島は恋人の家で共に酒を飲み、互いの愚痴を交換し合っている時にふと思った。

中園の存在も、別に悪いものではないな、と。

少なくとも家庭のことを職場に持ち込んで愚痴を言うような人間にはなりたくないし、こうはなりたくないという例を沢山目の前で見ているのだから、自分が気をつけなければいい話なのだ。

だが家庭を持つんだったら、転職を考えなければいけない、と牧島は強く確信していた。

会社の構造として、一番望ましい人材は「馬車馬」なのだから。

俺は、そうはなれない。だからこそ出て行かなければいけない。

牧島は恋人の名前を呼んだ。

ほろ酔い加減で返事をする恋人を抱き寄せ、耳元で力強く宣言した。

「俺、荒野で戦える人間になる」

何それ、とケラケラ笑っていた恋人が牧島の目を見て笑うのをやめた。

真夜中の街路樹を傘にして走っていた。

小清水には走る習慣などなかったが体調不良の検査結果を医者に「運動不足も影響していると充分考えられます」と言われてから、どのような悪天候でも走るよう心がけ一ヶ月が経っていた。

まだ本降りにはなっていなかったが「いつ本格的に崩れてくるかわからないな」と小清水は思った。

走るコースは決めていて、毎日同じコースを走っていた。

その日は霧雨が熱くなりかけた顔にも降り注いでいて、自然のシャワーを浴び冷却材代わりにもなっていた。

まだ日の照っている頃は人通りも多いが夜になると人の姿がまったく見えなくなる。また、メインの道路から一本逸れているため車通りも少ない。

そこで小清水は途中で妙な影を見つけた。

うずくまり、波打つように背中を震わせている女性らしき影だ。

最初は酔客が家路の途中で嘔吐でも繰り返しているのかと考えたが、姿だけ見ると咽び泣いているようにも見える。

通常の酔っ払いは支離滅裂で前後不覚な装いだが、それとも違う。

具合が悪そうだ、介抱してやらなければ、と考えた小清水は一瞬周囲を見て誰もいないことを確認してから声をかけた。

「優しいんですね。私なんかに声をかけてくれて」

女のしっとりとした声に謙遜しながらも小清水は鼻腔を思い切り開いて臭いを嗅いでいた。

汗のせいかな、少し生臭くも感じる。

ただその臭いが、今薄暗い中でも街灯に照らされうっすら光るように映えるうなじの汗から香るものだと思うと小清水は興奮を覚えざるを得なかった。

それも若い女だ。

心配を装いながら体に手をかける。

ぬめっとした感触が手に広がった。

汗？ いや、もっと粘り気のある汁。

濡れたアスファルトにところどころ水溜りが出来つつある。

木々の葉にたまっていた雫が少しずつ垂れて時折小清水の頬を打った。

「夕、タスケ、テ、ク、ク、クレ、マ、スカ？」

ほとんど聞き取れないようなか細い声で女に話しかけられる。

白い手がすっと首元に絡みつき、女の開けた胸元が瞳に飛び込んでくる。

透き通りすぎている。

葛餅のように透けて血管が見えている。

これが若い女の肌か、と長年見てこなかった光景に妄想を膨らませ疑問を持たなかった。

突然の女の口付けの後、ぬめりとした体に覆われ、男は少しずつ意識を失っていった。

倒れた瞳を横に向けると、濡れて広がる水溜りの向こう側から無数のナメクジが向かってきていた。

家の鍵を回す手が重く感じる。

デスクワークなのに、今日は一際厳しかったせいなのかな。

心すら引きずりそうになりながら、ぐったりとした体が安堵の溜息を出す。

左手の深夜スーパーで買ってきた袋の中にはお惣菜やレトルト食品が入っている。

ドアを開けると明かりが既についていて、いつもは安心感を与えてくれるはずが、やけに二の足を踏ませる。

そういえば彼氏が来ているんだって、と自分でメールの返信をしたにも関わらず今は逆の気分で重苦しかった。

玄関の足元を見ると脱ぎ散らかされ、かかとの潰された汚らしい運動靴があった。

「いい加減にしてよ」

といつもは気にも留めない光景に腹立たしさを覚え、散らかしこそしないまでも揃えない靴を今日に限ってきちんと揃えて上がっていく。

「おかえり」

深夜番組を見ながら、スナック菓子をつまみにチューハイを飲んでいる彼氏を見て「遅くなった」とも「仕事が忙しくて」とも言わずに一言「ただいま」だけを伝える。

スーパーの袋をガサゴソと音を立てて中のものを取り出すと案の定彼氏が「ダメじゃないか。レトルトのものばかり買って。そういうものは添加物も沢山入っているし、体によくない。栄養を取るならちゃんと調理したものを食べないと健康へのリスクだって高まるんだぞ」とげんなりするような忠告をしてきた。

「あのね、いい加減にして。私今日とても疲れているしお腹も空いていてすぐにもご飯食べたいの。私のお金で出して食べているものなんだからいいじゃない」

お腹がすいていて仕事で疲れていてストレスが溜まっていて、外資にシェアを取られるかどうかの瀬戸際のやり取りが続き気が抜けない状態が明日も待っているというのに家の中でも誰かにあれこれ指図されたり、ましてや自分の家なのに誰かに説教なんてされたくない。

実際深夜帯に開いているスーパーは、ほとんどの品揃えがレトルトや出来合いのものばかりで商品の方向性が徹底していた。つまり、疲れて帰ってきてこれ以上家事をしたくない社会人向け、と言ったらいいのだろうか。後は生活必需品が揃っていて「料理する人向け」ではない。

「結局病院に行くことにでもなったら、その治療費が高くつくじゃないか。いかに面倒でも、リスクという小さなコストを払い続けているんだから……」

「スナック菓子食べながら 安いアルコール浴びている卑劣の言うヤリフなの！？

あなた、いつも人に偉そうに言うけど自分がそれを守った試みがある！？私のこと守るって言うっておきながら私より稼ぎはないし、マザコンで自分の家族の方をいざって時優先させるし、今の環境を変えられなくてズルズル過ごしているだけなのに自分はこうするしかないみたいなのを言い訳ずっと続けて、いい年して恥ずかしくもないの！？それとさ、前の彼女のこと話題に出すの本当にやめてくれる！？気持ち悪くてイライラするし、切れた女の男のことで何か言うのって、どこまで湿っぽいの！？私仕事してきたの。明日も物凄くピリピリした状況が続くってわかってるの。ここが束の間の休息の場所なんだから奪わないでくれる！？」

一言堰を切ると止まらなくなっていた。普段思っていたことをだいたいはぶちまけて心から溜息が出た。

彼氏になって二年。最初の半年はよかったけれど、徐々にお互いの弱さがわかるようになっていた。健康志向というわけではないけれど、それ以外にも色々彼氏は調べた知識で心配をしてくれている。そして自分の中の「正論」をやたらに押し付けてくるため、現場で働き日々微妙な調整や利害の関係で苦しめられている私にとっては正直何の役にも立たない理屈だった。

私も寂しかったせいもあったんだろう。彼氏と別れて半年。同棲していた時の家の中のぬくもりが忘れられなくてバーで一人酔っ払っていた時に気が合った男とこうして付き合ってみれば、あちらも同じような事情を抱えていて、最初の頃は余計に分かり合えていると勘違いしていた。

でも付き合っていくごとに違いを感じ、一番困ったのは、いちいち打たれ弱く一度言っただけで一週間は落ち込むことだった。体だけは大きいのに頼りがいがなく、とても不安になる。このことでも後になって彼の精神のケアをするのは私なのだ。それすらも腹立たしい。

私は一度として前彼のことを話題に出したことはないのに、彼は寝取られた挙句、四ヶ月ほど気がつかなくなかったらしく、その間デートやプレゼントもしていたことを今でもグチグチと未練がましく言うことがあるのだ。寝取った男のこと、女に渡した多少の金品やプレゼントの食品が男に使われていたこと。最初の頃はさすがに同情して聞いていたけれど、さすがにねちっこ過ぎて気持ち悪いと思い出していた。

一体あなた、今誰と付き合ってるの！？と声を荒げたくなる気持ちを抑えこむのもストレスで、今は冷たく「やめてくれる？ しつこい」と突き放すだけだった。

彼は痛いところを突かれると、いつも黙り込んで落ち込んでやり過ごして、また元に戻る。この繰り返しだった。

テーブルの上に散らかった即席ご飯のパックとレトルトの中華丼、そしてサラダと肉じゃがが虚しそうに転がっている。

私、中華丼結構好きだったんだけどな……。

全部は食べきれないからご飯と中華丼は半分ずつ食べて朝に回すことにしていたのに、今はお酒だけ飲みたい気分。

私、一体誰を大事にしたいんだろう。そして彼も、誰の心を大事にしたいの……？

そうやって他人のことを心配しながら結局自分の気持ちを一番大事にしているから、その自己中心的な気持ちが相手に伝わってふられたんじゃないの……？

と、考えると我が身のことのようにも思えてきて、余計に疲れてしまった。何かを言う気持ちにもならない。

「ごめん。俺、お前のこと真剣に考えてるから、つい……」

彼の暗い声に反応する気にもならず、会話すら拒絶しようとしていた。どうせ学ばない。どうせ変わらない。

私だって今の状況で変わることはできない。なんやかんや、この仕事が好きだから。

会社の上司のほとんどは旧体質の頭をしていて「君、結婚は考えているのかね？」など、さり気無くセクハラにも近い言い方を時折されるのだから、この仕事が失敗に終わったら「だから女は」と言われるに決まってる。

それなのに彼氏ときたら、そんなこともわからないんだ。男なのに、ちゃんと真剣に自分の人生を見つめていないんだ。真剣じゃないから職場で起こる緊迫感も事情も汲めないんだ。だから私より稼ぎが断然少なく、いつまでも自分を変えようと思わないんだ。

……あっ……私、この人のこと見下してる……。

「うっふふふふ。はははははははは」

寂しい笑いが乾いた胸の奥から吹き上がってくる。

何が起こったのかもわからず、きょとんと私を見つめる彼氏。

「ねえ、別れようよ。もうやっていけない。疲れちゃったよ。明日の朝まで居ていいから、合鍵は置いて行って」

諦めなのか、勢いなのか、溜息を出すように告げていた。

「わかった。俺も頭を冷やすよ。だから君も冷静になったら、お互い話し合いを……」

「そういうところが大嫌いなの！！」

彼氏にとっては理不尽なんだろう。私には理由を説明するのが面倒くらい当たり前な事なのに。

そして最も理不尽なのは快く家に来ることをメールで返信されておきながら、職場の苛立ちをぶちまけられた挙句別れの言葉を聞かされることだろう。

そうだよ。わからないことだらけだよ。

でもね、それくらいわかって欲しいの。わかって欲しかったの。自分のこと並べ立てる前に、もっと。

彼氏があからさまに後ろ髪引かれながら出て行ってから、私はドアの鍵をかけ、散らかったお惣菜をそのままにテーブルに突っ伏して号泣した。

何が悲しいのだろう。明日目が腫れて仕事に影響出ないかな。

どうしてわかりあえないんだろう。どうしてわかってくれないんだろう。

そういえば私、前の彼氏とどうして別れたんだっけ……。

今は「前の前の彼氏」か……。

朝まで居ていいって言ったのに、すぐに出ていっちゃった。引き止めようとも寂しいとも思わなかった。私はただ安らぎたかった。その時間が欲しいばかりに、これ幸いにと彼氏を捨てたんだ。

きっとまたどこかで寂しいと思って、男と付き合い出しちゃうのかな。

この三年間忙しすぎて恋愛をする気にもならなかったし、別れたショックも一切引きずることはなかった。そしてこれからもそうだろう。

なのに、私は、どうして、泣いたのだろう。

居間のミニテーブルの上に置かれた飲みかけのチューハイを流しに全部捨て力の限り握りつぶして分別用ゴミ袋に、スナック菓子はゴミ箱に振りかぶって投げ捨てた。

そして部屋中に消臭剤をかけ、ベッドと玄関には念入りにつけ、シーツは剥がして全て新しいものに取り替えた。

時計は一時に近かった。余計な事に時間を使いすぎた。睡眠時間は二時に寝たとしても四時間少し。飲めるお酒の量はシードルだったら小さいやつが一本。それ以上は明日に影響が出るかもしれないから飲めない。

計画的で、計算的生活。

もう少し、かわいい女になりたかったな。

棚の上に飾られた集めているキャラクターもののコレクションたちが私にいつも笑いかけてきてくれる。

その中にコップの淵にかけられるものがあり、薄くピンクがかかったガラスのコップにシードルを入れて淵を飾る。

「また、お前と私だけになっちゃったね」

きっと、こんな辛気臭いところがかわいくないんだろうな、ともう一人の私が見下ろしていた。

明日がある。シャワーを浴びて全て忘れて寝よう。私には大事な日が待っている。

タイミングが悪かった、という話ではなかった。

ただあの人は、私の変化に一切気がつかなかった、というだけの話なのだ。

シードルを飲み干した後、シャワーを浴びるために浴室でブラジャーを取ると左乳の脇に五日前彼がつけたキスマークがぼやけて消えそうか熱い手で磋つてはいるの

その時、鏡に自分の顔が映っていた。その顔は、何となく、少しだけ、死んでしまったように見えた。
を鏡を見た。

いつもと、変わらない女がそこには居た。

禁酒の約束なんてするもんじゃなかった、と男は後悔した。

男というのは「つまらないな」、と時折思うことがあったが、その理由は「見栄のために安請け合いするんだから」とのことだった。

「お酒は体に悪いし、飲みすぎだから少し禁酒しなよ。来週ぐらいはさ」

「わかったよ。それできたらやらせてくれる？」

「考えとく」

男のスケベ心をみなぎらせ、冗談ともわからぬ言葉を投げかけひらりと女にかわされる。

たとえやれなくとも、ちょっといいところを見せてやろうという思いがムクムクと湧き上がり、滅多に我慢などしない男が我慢を強いる生活を一週間続けようと決めさせたのだった。

何故、酒を飲まなければいけないのか。

飲まない人間には一切わからず、ただ合理的な意見しか出ない。

「タバコは体に悪いんだからやめればいい」

という理屈は

「打席に立てばホームランを打てばいい」

という理屈にも等しい。

そしてその理屈を「言い訳」とし、冷たい目で見ると見る。

男はタバコは吸わなかったが、喫煙者の心苦しい事情が少しだけわかったような気がした。

ようは「約束事」に追い込まれていくのだ。

男にとって酒は「向精神薬」の役割を果たしている。

「肝臓壊して死んでいった患者さん何人か見てきたけど、ろくな苦しみ方しないよ。見てても地獄だから」

看護師の女に言われたことを思い出したが「だからどうした」と苦々しく聞いたこともあった。

心にこびりついた悲しみや苦しみはどうやったら拭い去ることができるのか。

男にとっての問題はいつもそこだった。

ふらふらと夜を徘徊し、騒がしい時間を逃れてようやく一人になれる。

数多く入ってくる他人の意識から解放されて、自由になれる。

だが終日男は脅えている。

いつ、過去が心を襲ってくるのか。

苦しみや悲しみの源泉は常に「若さ」の中にある。

ゆえに男は「若さ」に苦しめられるのだ。

搔き毟られる。ガリガリ、ガリガリと爪を立てられできかけの木版を削られるような苛立ちと憤怒に殴られ続ける。

動悸が激しくなり、息が荒くなり、怒りの言葉を吐き出して右往左往する檻の中の獣となる。

身悶えながら呻きながら皆このような苦しみを味わうのか、それとも俺だけなのかと、男は考えをめぐらせながらのた打ち回る。

まるで発作のように、病的に襲ってくる精神作用に虚しさすら覚える。

「何故、生きている」

その疑問を搔き消すために必死に車輪をこいでいるにすぎなかった。

意味や意義を自分で探し、自己嫌悪の中で「好き」を見つけていく。

あまりにも寂しき姿だった。

昔は周期が激しすぎて脅えきっていた。それが来ると、一日中何かで気をそらして一日をやり過ごす。それしか手段はなかった。思考を麻痺させて人間的な営みを徹底的に排除する。何も考えない。何も感じない。誰も心の中に入れない。酒、酒、酒。

数多くの嘔吐の果てに何が残ったのだろうか。何か残ったのだろうか。

か細く繋げた糸の先には希望らしきものも確かに存在する。

男は日々満ち欠けしていく月を見上げ、夜を徘徊し、酔う。昼間から襲ってくれば昼間から酒を煽る。

往生際の悪い抵抗をし、掴んだ心からベトリとした感触を得る。

ヘドロのように粘っこく汚らしく得も知れぬ臭気を発しながら汁を垂らし続けるそれを見た時、直視できずともそれと付き合い続けなければならない虚しい性を叩きつけられる。

景色などなかった。ただ荒野に立たされ、手に余るほどの恐ろしい広がり、気をしっかり保っていなければ自我など吹っ飛んでしまう。

やがては道標すらも忘れ、荒野のど真ん中で呆けてしまわないように男は意識を保ち続ける。

禁酒明けは酒を注いだコップをしばらく見つめ続けた。

痛みを忘れるために飲んでいた安酒が、依存のようになっていくのも時間の問題ではないのか。

気の持ちよう。気の持ちよう。

まるで神事のように酒と男の間の静寂に様々な思いが交差する。

「こんな気分で飲まなくていい日が訪れるのはいつの日か」

なみなみに注ぎきった酒のまずさを堪えながらぐっと一気に飲み干す。

もうすぐ、今日の記憶も消えていく。

能面のような顔つきで、男は沈んでいった。

銀と月下の泥

随分手が冷えてくる、肌が突っ張る。

そろそろ雪が降りそう。

待ち焦がれた季節。

空を見上げれば、曇り空が多くて。そこから数日。

ようやく降り出した十一月の雪は六十二年ぶりの降雪量だった。

積雪四十四センチ。湿った雪は木の枝に張り付いて一週間前に落ちきった葉の代わりに白い葉をつけている。

赤みがかったロングブーツを急いで引っ張り出して埋まる足元を気にしながら夜を歩く。

ぬかるんでいるように雪は積もっているけれど、時折凍てついていて滑りそうで怖い。

転んで白いコートが汚れてしまったら困る。

ふらふらと歩く。車を出してくれる。送ってくれる。そんな男は沢山いても、なんだか違う。

だって目的地がないから。

前に付き合ってた彼氏、滅茶苦茶だったな。

「散歩したい」って言って出て行って、酒臭くなって朝方に帰ってきて、大きなイビキかいて寝て。

ノーベル文学賞取るんだって、取れるんだって、酒ばかり煽って、馬鹿らしくなったわけじゃないけど、なんか怠惰さを手助けしているみたいな気分になって別れて、全部連絡手段絶って、さっと忘れようとしている。

私、普通に歩いているつもりなんだけどな。さっきから往来少ない車が高速道路を走るみたいに物凄いスピードで走りすぎていく。私の時間だけ遅くなったのかな？

雪が降り終わった後の凍てつきは、月の陰りを走らせて鈍い色で光らせる。

ピシリ、ピシリと肌を打ってくるのは夜の街の光なんだろうか、それとも月の光なのか。

あの日のキスの柔らかさを、ふっと思い出そうとして、そういえばあの柔らかさは彼のものなのか、それとも私を抱いた誰かのものだったのかよく思い出せなくなった。

ジャッジャッ。氷を踏みにじる音が月を削っていくよう。

そういえば彼、酷い時にはコンビニで買った安ウィスキーの小瓶を直接煽ってたんだっけ、と思い出し真似しようと思ったのはいいんだけど、ちょっと買うのも恥ずかしかったし、そして裸の小瓶を片手に持つだけでも周囲を気にしてしまうほどなのに、キャップを開けたら消毒液の臭い。

口をつけて少しだけ飲む。舌が痺れ、喉がきつく締め付けられ、食道や喉が焼け付くように熱くなっていく。

大きな公園のイルミネーションが消灯し、月夜の星たちが輝く頃、浮浪者みたいな真似して、酔いが回るよりも恥ずかしさで赤くなっている。

「死ねばいいのに。あのクズ」

コートポケットにすぐさまウィスキーの瓶を隠す。

知ろうとなども思えない、街はそのままの姿でいつもいる。彼がどこへ行こうと、どうなろうと何も変わらないのだろうとも思う。

私、なんでこんなことしてるんだろう。馬鹿らしい。

好き、嫌いはきっと条件反射のようなものなんだろう。

吐き気がする。

私には安酒は合わないみたいだし、きつい度数のものをグイグイ煽るなんて、まるで映画の中に出てくるやさぐれた男で、たいていは破滅に向かっていくようなやつ。嫌い。

月の光は長い針。人口のイルミネーションより綺麗な凶器。全ての針で私を一本ずつ貫いていけば、針先から流れてくる血の滴りの中に本当の気持ちが見えてくるかもしれない。

向かう場所が違えば、お互いが遠くなってしまうのだろうか。男と女。

宵に深みが増すごとに凍てついてくる。ブーツを取り込んで私を凍らせ、街も全て凍れば美しい。

空車の赤いランプを光らせたタクシーが何台も通り過ぎていく。ガリガリと氷のアスファルトの上を。

街をさ迷っても何か見つかるわけじゃない。たぶんだけど。

頭痛い。

お酒が酷い。

膝を突いてしまいそうなほどに、お酒にやられてる。夜が裂けて私は燃えて黒い消し炭。

これ以上は。

携帯電話を取り出し、適当に履歴漁って、通話ボタンを押してみる。

「どうした？」

「あー、車出して。もう歩けないんだ」

私、誰と電話してるんだろう。

「ああ。わかった。どこにいる？」

「うーん？」

電波塔のデジタル時計が十一時過ぎを示している。夜はもっとあるけど、それどころじゃない。

何を求めていたんだろう。キンと張った空気に私の息は白。

確かにここに私はいるのに、見慣れたものが目の前にあるのに、頭痛のせいなのか何処にいるのかわからなくなる。ドクドクと受話器の向こうで期待するような下衆な泥が受話器を越えて流れ出してきそうで、困って言葉に詰まった。

「聞ってる？ もしかして何処かわからないとか？」

「ごめん。わかんない」

通話を切れれば、流れ込んできそうな男の独特の嫌らしさみたいなやつも切れた。

馬鹿な時間を過ごした。どうして私、こんな。

タクシーを拾い、自分の住所を告げる。

何か変。本当に自分の家に帰るのかな。

嫌いだ。本当に。吐いてしまいそうな自分にも、頭の痛さも、意味不明なことをしている自分も。

さっきまでの世界は崩壊していて、タクシーは街灯の下をくぐるたびに見えないトンネルをいくつも通り抜けていくようだった。

この先には怖いものが待っている？ 未来は明るい？ でも私は私。変わらない毎日がきっとある。

マンションの部屋の前まで辿り着く。ドアを前にして鍵穴にいつもと少しだけ重く感じる鍵を差し込み回す。

カチャリ、と音が鳴り、きっと背中の世界は完全に崩れ去り、彼がいた世界もそこで消え去った。

部屋の中に入り扉を閉めれば、もう彼の世界へは二度と行けなくなっている。

明日休みの日、もしドアを開けて街に出ることがあれば、いつもの世界がある。

テレビをつければ深夜の天気予報では、明日は暴風雪。きっとお買い物どころじゃない。

コートを脱ぎ捨てテレビをつけっぱなしにしながら、あまりの具合の悪さにベッドに倒れこんだ。

「泥のようだよ。泥のようになってるのさ。眠って、壊れて、生まれ変わることなく、命が溶けてさ」

彼の言葉が頭をよぎったけれど、どうでもよかった。

もうすぐ私も泥みたいに眠る。

堆積する泥

人は汚泥の中でもがくのだろうか、と神村は思っていた。

今時珍しくペンと原稿用紙で小説を書き、昔なら三文銭と言えるようなわずかな収入を得ながら生き延びていた。もはや風貌は浮浪者とさして変わりはない。

神村清語というペンネームだが、これは本名の村上清志をもじったもので、清き言葉が神より降りる場所、という意味も込めていた。

たいそうな名前だが作品は売れず、売れないからと言って面白くないわけではないが、特に読者を選び、人生経験を重ねた年配によりやく理解できるようなことを書いているため、とっつきにくいという欠点があった。

元々彼は祖父に懐き、そのことが原因で両親から妬みを受け、さらに祖父に懐いていくという悪循環を繰り返していた思春期を過ごしたものだから、祖父の話から多くのことを得た。

どこか四十手前にしても頭は硬く、古い時代の思想を、そのまま人生訓として映し出していた。

会社経営をしていた祖父の取り巻きは良くも悪くも人間の業をよく示していた。金目当てに来る者がほとんどで、祖父の真の友達はというと、貧乏時代に一緒に過ごした不遇の芸術家ただ一人だった。

その芸術家は絵を描いていたが、ほとんど誰にも見せず、祖父にさえ見せたことは記憶のあるうちでは二度しかなく、その時買い取った二枚だけが家に飾ってあった。

芸術家は祖父よりも早く死に、数多くの遺作があったが、祖父が死に気がついた時には住んでいる場所は片付けられていて身寄りのなかった芸術家のすべてのものはゴミとして処理され、祖父が悔し涙を流していたのを我が事のように神村は覚えていた。

あの芸術家は、実力があったのだろうか。

家出する時に持ち出した一枚の絵を今でも時折押入れの中から出しては眺める。

湖畔に浮かぶ月の絵だが、何処か歪んでいる。その歪み具合が水面に映し出された月に吸い込まれるように描かれているのだと、泥酔した時によりやく気がついたが、このことに気がつくのに絵を最初に見た時から数えて実に二十年近くもかかった。ただの絵が動いて見えるのだった。

気がついてからというもの、才能の深さに畏怖したが、芸術家の死から十年近くも経っていたから存命中は不遇とは言いが、食うのにも困るほどの有様だったのだった。

そして神村も今、同じような貧乏生活をしている。

何故、作家を目指したのか。

理由はただ一つだった。

何をしても役に立たないから。

出来ないことはなかった。ただ習得に時間がかかり、自分のペースを守っているため、周囲の速さについていけないのだ。

そのような人間は利益活動をする会社という組織においてはお荷物になる。

だから、会社では生きられない。会社で生きられなければ社会で生きられない。綺麗ごとを言っても図式はこうなっ

いるのだから、神村自身の力ではどうにも抗いようがなかったのだ。

弾き出され弾き出されて辿り着いたところが、ここだけだった、という話だった。

ただ、一つだけ恵まれていたのは祖父の影響もあって芸術方面への興味はあった、ということだった。レコードはクラシックのみであったし、絵画にいたっては日本画も西洋画も両方古今東西、写真集も当時は揃っていたし、今は有名となっている写真家の写真もあったり、勲章までもらっている陶芸家の作品もあったりで、恵まれすぎているほどの環境はあった。

しかし神村には才能がなかった。

つまりは自分の知識や経験にこだわるあまり、今起こっていることや、見えていることを真正面から捉えず、過去と対比するばかりで進歩がない。

当然回顧主義と思われるような作品が多く、かつその多くに「喪失」的な観念が強く出ていたため、作風ははじめじめと女々しいような印象を受けた。

それでも神がこの男を見捨てなかったのは、時折「才気」とと思われるような作品を発表した。

社会経験も乏しく落ちこぼれの神村が感情のありのままに叩き出した作品数品。百を超える作品を書いているが、打率としては一割以下だろう。だが、凄みがあった。等身大の人間の偽らぬ生々しさがあって、かつ文章も簡潔であった。

その時の環境は決まっていた。ほろ酔いで、部屋は薄暗く、手元のスタンドランプのみで、六時間以上外には出ておらず、誰ともパソコンや携帯電話を通じて会話をしていない時だった。その数品の作品のみ原稿用紙の升目から文字が大胆にはみ出ているというのも特徴だった。

酔いすぎてもいけない。そこで何か食べたくなるが何も食べない方がよく、明るいばかりに様々な物が目に入ってくるのもいけない。外の影響を受けない集中できる環境であることも重要である、ということだ。条件が揃った時のみ結晶のような作品ができた。

神村自身はそのことには気がついておらず、バカらしくも生真面目に毎日文章を書いている。

何がどう受けているのか、神村自身に見分ける才はなかった。

作品のいくつかをネットで発表していた。誰もがやっているブログや自作小説発表サイトで出していたが、自分で印刷所に持って行って、紙の本にしたものを決まったお客に買ってもらうのが神村の収入源ではあったが、ある日ネットで作品発表ごとにコメントをくれる存在に気がついた。

あまり機械関係の扱いは得意ではなかったが、コメントをしてくれる人の存在があることによって覚えることも多くなっていった。

返信と、それへの返信。繰り返すうちに親しくなり、直接やり取りするようになるまで半年もかからなかった。

神村の古臭い思想にも同調してくれ、神村自身の作品にも大変思い入れがあるようで、自身が忘れ去った作品にまで熱く語ってくれるため、嬉しさよりも逆に申し訳なさの方が大きくなるほどだった。

これほどまでに傾倒してくれる人間が現れようとは思ってもいなかったため、神村の熱弁はより熱くなってくるが、相手はそれでも熱心に食いついてきた。

人の心とは妙なもので、いつの間にか心の中に大いに受け入れた存在を好きになってしまうものなのだろう。

両者が胸の高鳴りを告白したのは自然の成り行きだった。

聞くと相手は人妻だと言う。

特殊な思想を持ち、社会からはみ出した神村にとって、ほとんど親しく付き合う異性は、その人妻が始めてであった。

会いたいという思いは積み重なっていったが、神村には金がない。

近場ならよかったが、これもネットの特性。案の定遠方の人間だった。

自分がいかなる人間か、人妻にはことあるごとに告白し、後で嫌われるくらいなら今すぐにも正直に告白した方がいいだろう、という思いで包み隠さず言ったが、それでも好いてくれたことに驚きを隠せないでいた。

ふと、芸術家のことが頭に浮かぶ。

このまま親しくなったところでどうするということだ。不遇のまま死んだ芸術家のことを考えると自分はもっと酷いではないか。それなのに何故、この人と男女の気持ちを覚え惹かれていくのだ。それよりも以前に、俺には何一つ責任を取ることができない。

両親から未だに嫌われ、愛を知らなかっただけに人妻の想いには一つ一つ打たれ染みていくようだった。

母性に飢えていたのかもしれない。

結局人妻の支援を受けて会いに行くことになった。会いに来たとしても人妻の金を使うことにはなったが、神村にとっては初めての女となった。

かといって女に溺れるようなことはなかったのだが、神村自身の持論をぶつける場が人妻になったので、増長するばかりとなっていき、長年抱いていた両親への鬱憤も人妻にぶつけることになっていった。

生まれて初めて自分勝手にできるように感じた神村だったが、それでも真剣に人妻は話を聞いていた。

当然持論を固めてしまえば未来を見ることはない。未来を見ている錯覚を抱いているのみで今を無視していく。

その癖は人妻との関係にも影を落とした。

関係がばれることがなかったのは、人妻の旦那との関係があまりよくなく、離婚も秒読みであったことだった。

恐らく今から思えば彼女は自分との結婚を望んでいたのであろう、と神村はしみじみ思い出す。

破綻の原因となったのは神村が説教がましく指示が強くなっていったことと、理想が大きくなれば現実での苦労を無視して正論じみたことだけ押し付ける。そしてもう一つは神村自身が増長の果てに自らの能力を高く見積もりすぎ、浮ついた人間の関係性や金銭関係を取り扱ったことによる。

二年ほど関係は続いたが、崩れる間も半年と待たずおかしくなっていった。

最後には恨み節を吐き掛け、互いにののしるまでにはいかないまでも、きつい言葉を投げかけあっていた。

何がいけなかったのか。神村自身は未だに気がつくことがない。

ただ、人妻も神村の「過去の一部」となったため、根強く心の中に息づいているということだけだった。書く理由が神村自身にたった一つ強く生まれたため、そのたった一つにしがみ続けている。生きる理由だと言わんとばかりに。

神村の作品は売れない。その理由は彼が常に過去に生きているからに他ならなかった。

その作品群が将来日の目を見るかは神村自身も知るよしもない。

芸術家の絵を時折出すが、一分くらい見た後に目を閉じると瞳の奥底で渦を巻くようになった。

芸術家の絵の真の姿が、目を瞑った時によく見えるのは皮肉なことだと思い、残り少ない大きなペットボトルに入った安酒に神村は手を伸ばした。

コップ半分も体の中に入ったところで、神村はいつも通り泥に埋もれていく。